
かれおばな

藍沢 砂糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かれおばな

【Nコード】

N4318R

【作者名】

藍沢 砂糖

【あらすじ】

短編集。

徒然なるままに日暮し、PCモニターに向かい、心に移りゆく短き囁をそこはかたなく書きつくってゆく短編集です。

悲しい話、不思議な話、恐い話、怖い話。

何が出てくるかは開いてのからのお楽しみ。

かれおばな

幽霊の正体見たり枯れ尾花。

そんなふうに言うじゃないですか。疑心暗鬼の目に映るものって
いうのは何でも怖ろしく見えたり薄気味悪く感じたりするもんなん
ですよ。

風に揺れる枯れたすすきの穂が幽霊に見えたって事なんです。

だから怖いと思っっているものでも良く見ると大したものではな
かったり、ただの見間違えだったりするんですよ。

大体幽霊なんて存在する筈ないじゃないですか。

でも「もしかして」って思うからそんな怖いものに見えたりもす
るんです。だらりと垂れるすすきの穂が力無く垂れ下がる幽霊の手
に見える、そんな事もあるんですよ。

要するに見間違えです。

特に夕方になって薄暗くなると見間違えも多くなるんです。

ほら、駅前の賑やかな雑踏の中に体の透けた男の人が立っていま
すよ。でも良く見て下さい、あんなの信号待ちの人の姿がシヨウウ
インドに反射しているだけでしょう。

そんなものなんですよ、幽霊の正体って。

他にもあります。

道路に血の跡が点々と続いているのだって、ただの車のオイルの
跡。じっとこちらを見ている生首だって、ただの広告ポスターです。
言い出したらきりがありません。

公園の木で首を括っている男子高生。屋根の上からこちらを覗い
ている裸の子供。走っている車の下にしがみ付いているおばあさん。
これも全部見間違えなんですよ。

気の所為です。

それは外だけとは限らないんです。

家の中でも起こったりするんですよ。

窓の外から白い顔をした誰かが覗いていたり、コップが勝手に動いたり、冷蔵庫の中に人の手が入っていたり。

全部見間違えです。

妖しいと、怪しいと、怖いと、恐いと思うから気味の悪いものに見えたりもするんですけれど、本当は大した事ではないんですね。

枯れ尾花です。

家に帰って背広をハンガーに掛けていると玄関の戸が開く音がしました。妻と子供が帰って来たんです。

子供を幼稚園に迎えに行った後にスーパーで買い物をしてきたのでしよう、妻は近所のスーパーの買い物袋いっぱい今夜の夕食の食材を抱えています。子供はただいま、と元気良く言いました。私もお帰りと答えます。

今から夕飯の支度するからちょっと待っててね。妻はそう言っただけで台所に向かいます。一方で子供はカーペットの上に寝そべってお気に入りの絵本を読みだします。いつも同じページばかり開いているんです。

窓の外に目を遣ると真っ赤な夕陽が空を染めています。窓枠を象かたどった平行四辺形の斜陽が我が家の床を仄かなオレンジ色に光らせていました。

いつもこの時間なんです。

何でなんだよ。

私は妻に問いました。しかし妻は台所に向かったまま振り返りもせず、何の話よ、と返してきました。

このやり取り、本当に何回目なんでしょうか。

八度目ぐらいから数えるのを止めました。

私はネクタイを外して、ご機嫌で読書をしている子供の背後に立

ってその細く柔らかい頸にネクタイを巻きつけました。そして力一杯締めます。

数秒間足をばたつかせた後、その小さな体は動かなくなりました。間違いなく死にました。

そして私は押入れに仕舞ってあるゴルフクラブを取り出し、鍋に火を掛けて料理をしている妻の後ろにすうっと近付きます。

何度目なんだよ。

妻の答えは相変わらずの、何の話よ、でした。

私はゴルフクラブを握り締めて妻の後頭部目がけて振り下ろしました。小気味の良い手応えがしたかと思うと彼女の頭から血が飛び散り、まな板の上に零れます。コンロに落ちた赤い雫がじゅうと音を立てて蒸発しました。

妻は床に崩れ落ちて色彩の無い瞳でこちらを見詰めています。

私はコンロの火を止め、血を拭き取って、手際よく二人の死体を片付けます。早く始末しないと変な臭いがしてきます。以前そんな失敗も経験していました。

死体は今夜、いつもの山に捨てに行くつもりです。

見間違えですよ。

一体、何度目なのでしょう。

妻と子供は何度殺しても次の日の夕方には帰って来るんです。海に沈めても土に埋めてもガソリンをかけて焼いても、毎日同じ時間に同じ服を着て同じ買い物袋を下げて我が家に帰って来るんです。

元々、何で二人を殺したのかも忘れてしまいました。

今では毎日の作業のように二人を殺しています。昨日も今日も、きっと明日も。でも死んだ人間が生き返る事なんてある訳ないじゃないですか。

常識ですよ。

それなら二人は幽霊なんですか。いや、そんな事ある訳がありません。幽霊なんている訳ありませんよ。

見間違えですよね。

幽霊なんて全部気の所為なんです。

二人は、枯れ尾花なんです。

そうですよ、ね。

人の形を模すもの（前書き）

以前私がm i x iの日記にか何かに書いたものを引用しました。

人の形を模すもの

我が家には五体の日本人形がある。

製作者がはつきりしていて刻印まであるものもあるが、中には骨董屋で買ったようなものもあり製作者どころか前の持ち主すら分からないものもある。

その中の一体の着物に黒い染みのようなものを見つけた私は気になったので染みを落とそうと爪でカリカリ着物を引っ掻いた。しかし、それくらいでは全く黒い染みは落ちない。

水で軽く流そうと思い人形を持ち上げ洗面所へ向かう。

日本人形というものは本当にリアルなものだ。

手の中には丁度それぐらいの大きさの子供を抱いているような重みがある。

まさに人の形を模して創られたものなのだと実感する。

水道から水を流しながら染みをゴシゴシ擦っていると人形を支えている方の手にヌルリとした感触があった。

ふと、自らの手を見ると何か薄い膜のようなものが張り付いている。

人形に付いていたものなのだろうか。

よく見てみると、これは。

皮膚……？

思わず私は人形から手を放してしまった。

ドチャ……。

という音を立てて人形は床に生命力なく落ちた。

とても固い材質の日本人形が落ちた音には聞こえなかった。

まるでドロリとした液体を帯びた柔らかくて重いものが落ちたような音。

落ちた拍子に着物の帯が解けている。

私は恐る恐る着物に手を伸ばし体を確認しようとした。

これは人形だ。中には固く冷たい肌があるだけだ。と、自分に言い聞かせながら。

着物を剥ぐと私は愕然とした。いや、恐怖した。

柔らかい皮膚が剥がれ落ちドロドロした液体と管状になっている臓物が溢れ出していた。

背筋が凍りついたようになった。

手の震えが止まらない。

恐ろしくて喉がカラカラに乾く。

とても私一人の手でこの状況を対処することはできない。 どうすればいい。

ふと、家の近くで人形供養を行っている寺があることを思い出した。そこへ行こう。それしか方法は思いつかない。

覚悟を決め流れ出した臓物を人形の腹部に強引に押し戻しタオルで包み人形を持ち上げると首がだらしなく曲がっている。首が座っていない。 この人形には首に関節は作られていないはずだ・・・。

一人で居たくない、一秒でも早くこの状況を抜け出したい。

玄関の扉に手をかける。

するとそのとき。

―どこへいくの あたし もうすこしで ひとに なれるの

幼い少女のような声がした。

全身の毛が逆立つような悪寒がした。

私の腕の中から声がした。

ふと手元を見ると、目をぎょろりと見開き満面の黒い笑みで私の眼をしっかりと見つめる人形があった。私の眼を見つめながら彼女はけたたましいほどの高笑いをしている。

あははははははははははははと。

もういやだ。私は彼女の顔までタオルで覆い寺に向かって全力で走った。その間も彼女は私に語りかける、私の腕に爪を立てる、そして彼女の体がどんどん温かみを帯びていく。

―もうすこしなの もうすこしなのに どうして・・・

ようやく寺に着いた私は事情を説明し人形引き取ってもらいを供養してもらった。

住職も流石に度肝を抜かれた様子だった。

人形にここまでではつきりした心が宿ることは滅多にないそうだ。

これで助かった。

すべてを住職に押し付けるように私は逃げるように寺を後にした。恐怖と妙な責任感(?)から解放された私は気分もすっきり晴れ、軽い足取りで家路についた。

さて、今から何をしようか。そうだ、テレビでも見よう。ソファ―にゆったりと腰掛け、テレビをつける。

特にみたいとも思わないが天気予報をぼんやり眺める。

また明日も雨か。最近雨の日が多くて憂鬱な気分になる。

煙草に火をつけソファ―の上でさらに体勢を崩す。

ぼんやりテレビを眺めていると私の肩に手のひらが置かれ、耳元に生暖かい息がかかった。

―また ひとりに するの？

という夢を見た。

思い返してみるとB級ホラーのような話なのだが、夢にしては妙にリアルで考えさせられる内容だった。

「また ひとりに するの？」

人形は年を取らない、人間は年をとる、そして人間は死ぬ。

人形だけがそこには残る。

独りっきりになった人形は何を思うのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4318r/>

かれおばな

2011年6月8日23時22分発行